

月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

7

《EKUTEBIAN VOL.7 JULY 1990-EKUTEBIAN》



まい あーと
■油彩「少年の身」
by 田中正巳



羽衣町からも土器の出土が



作業現場で



一で火が焚かれた



立川遺跡発掘現場



縄文人の耳飾り



調査団長・吉田 格氏(立正大学講師)



エレガントな石皿



古代の宝庫、歴史民俗資料館

立川の縄文人

古代へのユメは地下に眠っていて、心ゆさぶる。この土地に住んでいたであろう、太古の人々の生活が明らかにされようとしているのだ。縄文時代。もちろん「立川」という名称すらなかったが、錦町4丁目の「向郷遺跡」からの出土品はあおなだしい現代人に古代へのロマンをかきたててやまない。(協力：立川市向郷遺跡調査団)

子どもたちの歌声は 国を越えて

—ミュンヘン・テルツ少年合唱団の来日—



去る6月2日、市民会館大ホールで「テルツ少年合唱団」の演奏会が行われた。立川市文化財団の主催によるものだが、そこに立川市立小学校の子どもたちも賛助出演、歌を通じて国際交流を深めたが、深まったものはそれにとどまらなかった。



▲合同練習では回を重ねる毎にくぐぐん上達。

少年合唱団として最高水準にある「テルツ少年合唱団」。その立川公演に際し、一歩踏み込んだ交流を、と子どもたちの賛助出演を市内の市立小学校21校に呼びかけたところ、当日出演可能な18校全てが参加。6年生10人による「立川市立小学校連合合唱団」が誕生した。4月18日の結団式の後、さっそく各学校ごとに練習を開始。土曜日には二小体育館に集まって合同練習を重ねた。その全体指導に当たった佐藤決子音楽教諭(二小)は語る。



▲三小体育館で開かれた交歓会には中学生も参加、コーラスによるエールの交換も。

「合唱経験のない子がほとんどでも、みんな知らない世界にとびこんだという感じで目を輝かせて集まって来て。欠席なし、には驚きました。学校の中だけでやるよりはるかに歌唱力がつきました。参加を許可して下さった校長先生

とも実現不可能と思っただれでも子どもたちが向上してピツクツクしました」と文化財団関係者も喜びを語る。参加者の一人、二小の石井由美子さんは「スゴくおもしろかった。毎日休み時間にも練習して遊ぶヒマなかったけど、先生がいなくても自分たちで練習したり」と声を弾ませる。世界で活躍する少年合唱団との共演、そして演奏後の交歓会。子どもたちの感想文がその成果を語り尽しているようだ。こんな学校の行事よりも最高の思い出になった。一生忘れられない。

表紙は語る

まい あーと ●絵画「少年の夏」 by 田中正巳

金沢美術工芸大学出身。専攻に「わえて、もって生れた才質なのだろう、やはり進むべき道は絵の世界と心にきめ、10年ほど中学校で非常勤講師をつとめながら絵筆をはこんだ。「少年の内面を描くことが多いのも、長年、中学校で教えていて少年時代にたいする特別な気持ちが知らず知らずにはたっているんでしようねえ」

ふれあい さわやか



山梨中央銀行
立川支店
〒190 立川市南町2-16-13
TEL 0425-26-1571

ことわざ 問答
漢字一字挿入せよ
雨降って 袖振り合うも 生の縁

7月5日 木
「交歓会」
会場：こぶし会館
時間：PM7:00～

昭和十二年に開業した、立川で最初のホテル「無門庵」には、おごそかな、とか、気高い、といった言葉がよく似合う。キリスト教という「グレイス」というのだから、崇高なという意味のグレイスには、一種毅然とした響きがある。何しろ十年か十五年ぐらい昔に、たまた無門庵の前を歩いていたのだが、その頃から客の入り

姿を見かけたことはなかった。平日の午後に通る道なので、宴会客に会うこともなかった。だから、よけいな雑音にさえぎられず、その日本旅館の床しさを眺めることができた。

錦町一丁目、南武線の電車の音がすくそこ聞こえる「無門庵」は、今春解体された。わずかに、本館だけが残されている。割げた壁、今となつては何もない殺風景の建物に二階の蛍光灯が、ボツンと残されていた。日本料理のお店に生まれ変わるという話だが、開店したときに行ってみるべきなのだろうか、ちよつと悩んでいる。

立川クイズ

立川市の昔の暮らしがイキイキと目にうかんでくるような言葉に出会いました。その頃を懐かしく思い出される方もいらつしやるのではないのでしょうか。

立川市の花は「こぶし」の他に、すみれ、つつじ、サルビア、コスモス、さざんか、水仙の6種類。

トイレがオシャレに

最近、公園に設置されているトイレが、とてもオシャレになってきているのにお気づきですか。たとえば、諏訪の森公園、柴崎中央公園、そして立川陸上競技場裏に

いま建築中のトイレ。立川市役所公園緑地課では、「いわゆる3K(汚い・暗い・臭い)を追放すね。それから身障者のための施設とか、更にはトイレを単体として考えるのではなく、ベンチを置いたり、水飲み場を併設したり、電話がかけられたり、市民の憩いの場になつてくれたら」と語っている。

立川・トピックス

二期会の大島洋子さん(ツブラノ)、大島幾雄さん(パトリック)の歌声が聞ける。5月27日、ティールーム「木の葉」(柴崎町1丁目)は50人をこえるファンでうまった。

当日は「宵待ち草」や「出船」など馴染みぶかい曲からはじまり、モーツァルトのオペラのなかからポピュラーな名曲ばかりをズラリ、解説を加えながらの熱唱で会場は静かなうちにも深い感動に包まれていた。「木の葉コンサート」はこれで3回目。ジャンルにこだわらずに出来れば月一回のペースでライブハウスとしての機能も果たしていきたいと、意欲的だ。

日本人、と特定しなくても人間

日本人、と特定しなくても人間は本性、旅を好む生物であるらしい。旅の話題ならテレビでも雑誌でもよりどりみどりである。筆者は思いつく限り、あれこれ旅の自慢話に夢中になってきた。たしか、ノルウェーからフィンランドへかけての波乱に満ちた旅話で、おしまいですつかり聞いてくださつた先生がひと言「お前は、そりや旅というよりも、移動だ」とおっしゃつた。脳天をハンマーで叩かれたようなショックをいまに忘れない。旅とは「心の動き」そのものを云うのであって、本来、移動とは関係がない。遠くへ行けば「大きな旅」になるとは限らないと先生から教えて頂いたことがある。かすかな風の囁きにも耳をかたむける日常の叙情と、心の動きを大切にしたい旅など存在するはずはないのに、新しく連載をはじめた「立川発カルチャー・トレイン」を契機に、全身これ「心の動き」に反応するようになれば、と、鈍感な精神に言い聞かせているところだ。わずかに半日の「小さな旅」のなかで、花に呼び掛けられることもある。人に遭うこともある。いやいや、向郷遠遊ではないが、いきなり縄文時代に立ち返つて、古代人と話ができるかもしれないのだ。オレは旅が嫌いだ、などと云つてみて、この地球そのものが日々、旅に明け暮れているのだ。水や月、月に吹かせる、えくてびあん。

えくてびあん 第72号
平成二年七月一日発行
発行所 えくてびあん編集部
東京都立川市富士見町2-20-15
パークビューハイイツ501-1111
電話 0425-250082
FAX 0425-2501297
編集人 立井啓介
発行人 沖野嘉男
印刷所 協大廣社

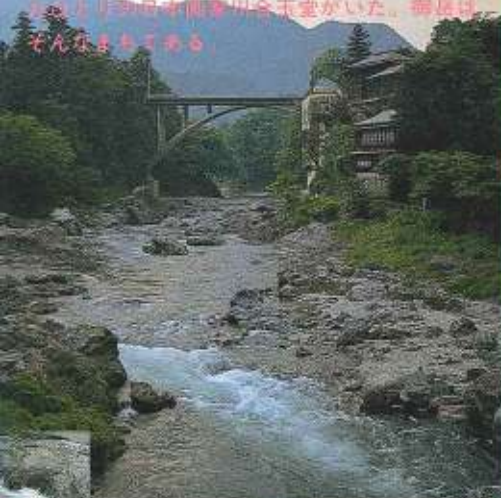
「編集」石巻教養 小川知子 神山清子 関川理
山田恵子 中村絵里 半沢正弘 藤田悦子
「写真」天野嘉男 板橋一明 吉田昌隆
スタジオ269 杉川一巳 本多啓

「5月号の答」 さくら
立川市の花は「こぶし」の他に、すみれ、つつじ、サルビア、コスモス、さざんか、水仙の6種類。

立川市の夏は最近彩りの濃なものになってきました。花火大会あり、お祭りあり。昭和記念公園には他の地域から大勢の子供づれで賑わいます。真如苑では、この夏も「静かな午後」で皆さまをおもてなしたいと思います。

日本人、と特定しなくても人間は本性、旅を好む生物であるらしい。旅の話題ならテレビでも雑誌でもよりどりみどりである。筆者は思いつく限り、あれこれ旅の自慢話に夢中になってきた。たしか、ノルウェーからフィンランドへかけての波乱に満ちた旅話で、おしまいですつかり聞いてくださつた先生がひと言「お前は、そりや旅というよりも、移動だ」とおっしゃつた。脳天をハンマーで叩かれたようなショックをいまに忘れない。旅とは「心の動き」そのものを云うのであって、本来、移動とは関係がない。遠くへ行けば「大きな旅」になるとは限らないと先生から教えて頂いたことがある。かすかな風の囁きにも耳をかたむける日常の叙情と、心の動きを大切にしたい旅など存在するはずはないのに、新しく連載をはじめた「立川発カルチャー・トレイン」を契機に、全身これ「心の動き」に反応するようになれば、と、鈍感な精神に言い聞かせているところだ。わずかに半日の「小さな旅」のなかで、花に呼び掛けられることもある。人に遭うこともある。いやいや、向郷遠遊ではないが、いきなり縄文時代に立ち返つて、古代人と話ができるかもしれないのだ。オレは旅が嫌いだ、などと云つてみて、この地球そのものが日々、旅に明け暮れているのだ。水や月、月に吹かせる、えくてびあん。

ひとひれ急流の甲山等し瀑布をめぐり、立川から八里までの間に急流の連続する御岳がある。また、そこには御岳の御神により多くの人々に自然の発見を惜しみなく与え、その功により御岳御神合玉堂がいた。御岳は、そんなところである。



御岳の川合玉堂さん

立川 発

カルチャートレイン

半日ほどの「小さな旅」へ出てみませんか。そこには思いかげなく自然が息づいていたり、懐かしい「この人」に会えたり。



★乗車料約160分(片道440円)
★車でいりかぎ約15分(片道)
MEMO: 立川市の文化「まち」をめぐり



直伯のことが知り知る、
御合三男直伯



昭和189年頃に、川合直伯の夫ラジの早によって御合館が建てられた。



神車を通した玉堂山房。下駄を履きおめせながら、こんな規模より門外を覗き、今日尚も急流をまじみにしていたであろう直伯。今でも御合館の上には、その建物の姿を見ることが出来る。